

今與へられたる點小の橢圓内 P_1 に在りたるときは OP を連結して之を伸長し小なる橢圓を E' にて截りたるとせば E' を通じて切線 $P'D$ を引き而して P_1 を通じて並行線 MN を引きて三角形 MN を作るときは此三角形は要件に適合すること明なり

(三) 共軛徑は圓にては互に直角をなして其端を連結して作りたる正方形の積は $(a^2)^2$ なり故に共軛徑の端を連ねて作りたる平行方形の積は $2a^2 \times 2b^2 = 4a^2b^2$ となり故に今橢圓の短軸長軸各々 $2a$ 及び $2b$ に等しきときは其積 $4a^2b^2$ となるなり

之に由つて之を觀れば射影法特に直角射影法の証明は簡易に且つ明瞭なることは代數的証明に優ること多し故に二次方程式の曲線を研究する者は射影法二三の原理を知ることがを要す

島津泰清公の遺事

(續)

含紫樓主人

大學頭林春齋、藩邸の門を過ぐるごとに、必ず轡を下りて歩む、風雨の日といへども、亦之かり、或人、春齋に、足下、平生、薩摩守と相識なし、何ぞしも敬の厚きや、と問ひければ、春齋對へて曰く、薩摩守ハ、有道の君なり、恩惠、國中に加はり、聲名、海内に播まる、我いかで敬はざるべきと云ふ、韓使の江戸に來聘するたびに、必ず侯伯の會同を觀る、その輿馬の絡繹として來たるをみても、嘗て敬を致さず、只、公の駕の至る、儀衛整肅、他に異なるを見て、指さして、彼ハ何殿に候や、と傍への人に問ふ、是は薩摩侯なりと告ぐれば、韓使、容を改めて、拱立し、是必ず、常人にあらざるべし、吾その從者のみるに、精神盡くその主に注ぐ、平素深くその歡心を得給ふにあらすば、烏ぞよく此に至らん、と感歎し

て言ひけるとなり、

明僧黃檗の木菴、歸化して山城の宇治にあり、公の賢を聞きて一たびまみえんと欲す、公も素よりその名を聞きしむ給ひしうば、伏見に次り給ふをり、公みづから往きて訪ひ給ふ、木菴公の至り給ひぬると聞きて、遽に出でて迎へ奉り、その神姿を望みて大に驚き、さて坐定まりて談論日を移し、去り給ふとき木菴目送して云ふ、日本にもこの人を生ずるか、親しくその人を見れば、かねて聞きし所に過ぎぬと、嗟稱時を移しけるとぞ、

時に京師に押字を相て、その賢否貴賤を知る術士あり、碓山次右衛門同列と議し、公に申してその華押を乞ひ、私に使者を遣してこれを示す、術士これを見て大に驚きて曰く、是の人やむことなき御方にして賢明にましますべし、古先哲王の徳といふともこれに過ぐべからず、意ふに是必ず薩摩侯には御座なくや、使者因てその實を告げ、歸り來て具さにその語りし所を申上げしうば、公次右工門に命じて、再び使をやりて、金と蕉布とを賜ひまといふ、

公幕府の朝會に登城ありて暴かに疾を得、已にして危篤に及ぶ、その報、國に至りしうば、國人驚愕憂懼、上へ下へと騒立ち、貴賤老若物狂となり、天神地祇に禱りて身を以て代らんと求むる者さへあるに至る、その薨じ給ふと聞くに及ては父母の喪にあるがごとし、既にして喪至りて福昌寺に葬り奉る、士民の送る者老を扶け幼を挈げ、哭聲遠近に震ふ、柩已に寺に入りて人猶去らず、官人慰諭して還らまめければ、人々やうくに泣を掩ひて散ず、是より國中蔑ど聲立つる者なく氣色黯然たり、他國の使者來吊するものも、嘆惜流涕せざる者なかりき、初め公の箱根を過ぎ給ふ時、三人の獵師ありて手に禽を持ちて獻つる、公駕を止めてこれを受け、厚く謝し、且物を以て酬ひ給ひしかば、皆感悅して歸

りしが、喪の西に歸へり給ふに及びて、三人の者共各家人をひきゐて出で來り吊哭す、凡そ道上柩の止まる所、士人の素服して來吊ふもの往々あり、江戸の商賈にて藩邸に出入するものなど、相率ひて喪を送り、その中に相隨ひて大阪まで至りし者もありとや、

公の疾に寢し給ふ、家老より以下諸の有司、晝夜看護、一夕御膳を出しけるに、その羹鹽多かりしらば、家老某怒りて庖人を責め、且膳宰は誰ぞと問ふ、庖人、竹内助市なりと對ふ、助市これを聞きて大に憤り、家老に向つて申しけるは、さて、君達の此に御座なされ候は、美味を召上らんが爲めにて候や、助市が如きは身主君の御恩を蒙り、常に報効の日なきを恨しく存するなり、然るに今不幸にして主君疾に罹らせられ、醫藥効なく日夜憂苦して、手足の措き處もなき様に存するに因りて、拙者の意、實は料理鹽梅には御座候はず、口にも味を弁せざる程に候へばこそかゝる疎忽も候はめ、然れども身既に膳宰たれば、奉公の無狀なるは恐入り候ゆる、今より職を辭し申すべしといふ、是に於て衆俱に中に入りて慰解し、事漸くすみけりといふ、

相傳ふ、公の世を即り給へる、人多く毒害に中らせられしにやと疑ひ、物議頗喧しく、東郷九右衛門の如き、深く憤り、建議して問罪の師を興さんと欲し、その事行はれざりしうば、遂に狂氣を發して卒す、その他の群臣にも哀惋思慕、生を欲せざる者あり、碓山次右衛門、自殺して従はんと欲すれども、殉死は公の平生深く惡し給ひしことなればとて、情を忍びて敢てせず、鯨嶋藤七といふ者あり、是も誓ひて自殺せんと欲するを、高崎某、伊藤某、兩人して書を遣はしてこれを止めて曰く、足下先君の眷愛を蒙むられ候へば、身を以て殉せんと思立たれ候は、誠に尤の御志には候へども、殉は天下の大禁に候へば、禁を犯して自その志を行ひ候は、是れ忠を欲して反つて不忠に陥るものには候はずや、只今

この書を以て足下の學を御止め申候ハ、後世に足下の敢て殉ひ給はざりしハ、我等が言によりて止まられ候といふことを知らせんとてに候と申けるとなり、

延寶二年四月二十六日、夜半福昌寺火を失ひ、堂閣盡く灰燼となりしが、火ハ公の廟のみに及ばざりしとて、一時傳へて異とせりとまむ、

右ハ嶋津泰清公の遺事にして、舊薩藩、府學助教、今井惟宏の漢文にて書けるを譯し、となり、惟宏の贊に曰く、惟宏、公の遺事を編みて筆を舎きて嘆息し、涕淚横流、蓋その然るを知らずして然るもの、これ果して何を以て然るや、曰く仁の之、甚い哉仁心の人を感ずるの深くして遠き、一國に君臨して一國その德澤を被る、一國の人これに感ずる可なり、他國の人何に由りて之に感ずる、その風采を聞き、その儀刑を見る者、皆その仁に歸してその人を慕はざるはなし、而るを況んや一國の人をや、その流風餘韻、藹然として國に被るもの幾と二百年、士君子の談する者は口を噉き、聞く者は衽を斂む、あゝ亦盛なり、平田可竹といふ者あり、兵家者流なり、公の時まで仕へたり、後着邦公の前に在りて兵を談じて曰く、古今良將多うれども、皆我が泰清公に如かず、他なし、その能く人心を得給へばなりといへりとぞ、夫れ公は守成の時にありて、未嘗て兵に將たり給はず、而るに可竹のこの言を吐く、亦以て當時上下相交り、人心歡洽、學國の人管骨肉手足の若きのみにあらず、與に水火にも赴くべく、與に白刃をも踏むべく、強弱衆寡はその論する所にあざりしを見るに足る、かくの如くなれば、天下に横行すども、これをよく禦ぐものあらんや、此に由りてこれをみれば、公ハ豈唯守器の器のみならんやといへり、余謂ふに、古より今に至るまで、薩人の君臣の大義に厚き、士風の他方に超えたる、その淵源全くこの名君の化育にあり、豈一朝一夕の故ならんや、あゝこの仁、この勇なくば、いかでう民心を收

め、兵氣を奮はせむることをえんや、去らず今の世、この一体をだにも具するものありやなしや、天下は決して虚文をもて實効を收めらるべきものにあらず、決して徒法をもて操縦を施さるべきものにあらず、余時に感ずる處なきにあらず、これを世に弘むる所以なり。

(未完)

死を怖れざる精神

大野 禱 一

二百六十有餘の骨片、相集て一格を成し、筋肉之に帖き、皮膚之を覆ふ、五臟之に寓し、六神之に宿す、是に於て乎、初めて靈妙の活体、人なるものを生ず。思想の妙なる、智慧の靈なる、他に優るものなし。然れども、一旦損傷の致すところ、一臟その動を廢し、一神その用を絶たんが、皮膚飛び、筋肉散じて、餘すところは只壘々たる骨片のみ、而して、その骨片を風露に暴して、亦將に土に歸せんとす。先の辛酸苦樂の感、將何れの處にか求め、先の靈活奇妙の氣、將何れの處に尋ねん。俗人之を思ふて、膚粟ち、英雄之を思ふて、目に淚あり。幾多の帝王功成て、不老不死の藥を求む。世人の死を怖るゝ誠に故あり。然れども、身ハ元これ土より出でたるもの、固より土に歸せざるべからず。所謂「結ばば草の盧にて、解くればもとの野原なり」なるもの、腐何うあらん、死何かあらん、我は只まことに、己れの義務を盡さんのみ。識念是に及で、死を怖れざる精神生ず。

世哈りて曰く、我日本人は好んで自ら死するの風ありと。焉ぞ知らん、この風なるものは、この識念の感化する所、吾義務を重じ、吾体面を重じ、道義の以て枉ぐべからざるを知り、死を鴻毛より輕するの致すところたるを。是固より、世の事に當りて死することを知らざる軟腸男兒の見て以て奇となす所にして、我國人の見て以て怪しまざる所なり。我國古より武を以て國を建つ、尙武の氣風煥發する所、